

間伐材活用に挑む

矢巾町の 水清建設 木質バイオ化を研究



木質バイオマス事業について話す水本孝水清建設社長

矢巾町西徳田の水清建設（水本孝代表取締役社長）は、伐採し山林に残されている間伐材を活用した木質バイオマス事業の検討をしている。木材価格の下落で間伐材を製材所に搬送した場合、輸送費の負担で赤字となるため山林に残されている。水清建設では伐採、

搬出方法を見直すことで作業を効率化し、公共工事の端境期の仕事として木質バイオマスへの活用を考えているという。複数年かけて調査検討する予定。初年度は県の建設業新分野進出等支援対策事業で100万円の補助と自己資金166万円の266

万円の事業費で取り組んだ。いわて木質バイオマス原材料確保促進協議会を設立。メンバーは岩手大学の沢辺攻名誉教授、葛巻林業、岩手中央森林組合、県建設業協会経営支援センター、NPO法人いわて銀河系環境ネットワーク（事務局は水清建設）、県もオブザーバ



今年度の調査で実施した列状間伐した木材の引き出し（水清建設提供）

ーとして加わった。林業者が伐採し、水清建設が搬出。岩手中央森林組合の加工場へ運搬、破碎した間伐材を紫波町のえこ3センターでペレット加工する。その後、紫波町内の公共施設、磐石町にある県営温水プールのチップボイラー燃料として販売するまでを想定している。

見直し点は一般的とされる山林内の成長の遅い木を選び伐採する。定年伐をやめ、伐採搬出時期は建設業の公共工事端境期の時期にさせてもらえないかという交渉を森林組合と一緒に山林所有者としなければならぬ」と説明する。

今後については「水清建設として山の作業の現状を知らず、林業者やアドバイザーから聞いただけの話で検証した。実際にみて状況が分かったので来年度は事業化にどういふことを検証すべきかのポイントも計画できる。事業化した場合、現場から破碎場までの距離、林道の幅など取支が合わない条件の場所が山林所有者に伐採の提案をしない。採算の合う部分だけ提案することになる」と話す。

木を林道に引き出しやすいように列に合わせ伐採する列状間伐方式を採用すること。搬出は伐採木を細かく切断せずに引き出す。水本社長は「つまり出しやすいように間伐してもらえば現場の条件によっては採算の合うところも出てくる。搬出時期は建設業の公共工事端境期の時期にさせてもらえないかという交渉を森林組合と一緒に山林所有者としなければならぬ」と説明する。

「建設業は公共事業が減っている。林業は担い手が不足している。そこで建設業者が林業をできないかと考えたとき、知恵を絞らずに人を派遣するだけでは難しい。事業の提案力、現地での施工計画については建設業はノウハウを持っており十分生かせる。森林組合と連携することでスムーズに行えると思う」と話す。